

t
e
a
r
:
:
:
s

作
伊藤風柳

《登場人物》

ルイ (17・27・37・47)

〈声〉

母
恋人
マイ (娘・8)

※開演前

開場BGMの最終曲は、ヴィヴァルディの♪協奏曲集「四季」♪より、
〈春〉の第2〜第3楽章（約8分）。
適時、楽曲と客電が徐々に落ちて行く——

○thirst（渴望）／起・17歳の春に喜

春雷が遠方で鳴り響く。

家屋の一室——無数の带状ゴムが天井から下がり、牢獄の様にも見える。
制服姿のルイ（17）が、顔を押し付けた膝を抱え、しゃがみ込んでいる。

ルイ「——ああ、ヤダヤダヤダヤダヤダ、ヤダ、ヤダ——何で？ どうして？
私がこんな……崩れる、潰れる、腐る——違う。萎む、枯れる、朽ちる、
干乾びる！ ヤダヤダヤダ——ヤダ——（顔を上げて）ここには、この
家には、渴きしかない。カラカラ、カサカサ、ザラザラ。親子関係も、
夫婦関係も、他人との人間関係もそうでしょう？ 関係だけじゃない。
すべてが渴き切っているのに、縛られてもいるの！ 家族っていう血の
繋がりが。見えない、当てもならない、体裁だけの絆、鎖に、縛られて
いる。喉を掻きむしっても、唇を噛み締めても、全然潤わない。もがい
ても、引き千切ろうとしても、心に掛けられた錠や枷は外れない——」

姿勢を変えて跪く。

ルイ「どうすればいいの？ どうしろって？ 生活が苦しいのは私の所為？
夫婦喧嘩が絶えないのは私の所為？ 目障りな邪魔者扱いしているのに、
いちいち干渉するのは、私の所為？ こんな最低最悪の家庭環境、もう
何年になるの？……私は、何も出来ないよ。私の方が、被害者だもん。
ずーっと気持ちが悪ざつ放しで、気が可笑しくなりそうで、狂いそうで
……ここに、愛なんてない……」

立ち上がり、歩き回る。

時折、止まったり、带状ゴムを格子に見立てたり、屈んだり——

ルイ「ねえ、何があったの？ 何かなくちゃ、何か重大な、衝撃的なことでも
なくちゃ、こんな風にはならなかったんじゃないの？ ねえ、何で結婚
したの？ 母さん。何処が良かった？ 多分、私には理解出来ないけど。
恋愛だったんでしょ？——その前、結婚する前は、何を？ 仕事？
どんな？ 何かやりたいことはなかったの？ 子供の頃は？ 将来何を

したいとか未来予想図とか。自分から何かしたことは？——嬉しかったことや楽しかったこと、喜んだこと、ある？ いつのことでも——聞いている？ 聞こえている？——ねえ、母さん、幸せなの？ 今——」

しゃがみ込み、再び膝を抱える。

ルイ「渴き切った、縛られた家じゃ、未来も、夢も、見ることは難しいのよ。でも、私は……私に許されていたのは、ただ一つ。想像の世界を広げることだった。唯一の自由！ 想像では、草原を駆け回ることも、水面でステップを踏むことも、大空を飛ぶことも出来る！ 私の体はね、風に吹かれて、風を感じて、自然と動いちゃう！ 止められない！ 止まりたくない！ 心地好い汗が跳ねて輝く！ 心が解放感と爽快感で一杯になるの！——私、踊ることで生きて行く。舞踏家になって、自分の力で生きたい！ 抗えない!? 泣けない!? 進めないって、何!? 感情を殺して流されるだけ、耐え忍ぶだけの女になんてならない！ 人形のような女になんてならない！ 母さんみたいな女には……ごめんなさい……そういうつもりじゃ……母さんの方が、もっと渴いて……」

抱えた膝に顔を押し付ける。

ルイ「……ヤダ、ヤダ……ヤダ……」

春雷が遠方で鳴る。
間。

母の声「好きになさい。ルイの人生だもの。したいように、思うように。自分で幸せを——ごめんね、何もしてやれなくて」

顔を上げる。

ヒバリのさえずりが微かに聞こえる。

ルイ「……ヤダ……本当？ 許してくれる？……ダメだよ……ありがとう……」

ゆつくりと立ち上がり、微笑み、喜びの涙を流す——

BGM♪「四季」♪〈夏〉の第1〜第2楽章（約8分30秒）。

17〜27歳の頃にあるであろう躍進や苦悩などを、ダンスで表現する。その最中、衣装替えやメイクの修正も表現手段の一つとして行う。
明転（帯状ゴムの設置を変更）。

ヒグラシの鳴き声が木霊する。

避暑地の森林——带状ゴムが不規則に交差し、樹木の様にも見える。
夏服のルイ(27)が散歩する。

ルイ「——ああ、ホラホラホラ、あの樹。うん、多分、確か、そう。幹に穴が開いていて、神社で引いたおみくじを丸めてね。秘密の隠し場所って？子供の遊びみたい。だって、二人共大吉なんて珍しいじゃない。もう2年、3年前？ まだあるかな？」

带状ゴムを木の幹に見立てて穴の中を探る。
隠したおみくじはなく、辺りの地表を見渡す。

ルイ「風に飛ばされたり、雨に流されたり、鳥がついばんだり、リスがエサと間違えたり？ フフフ。でも、大吉のご利益はあったよね——イタリア公演の時に聞いたんだけど、ローマにトレビの泉ってあるでしょう？ コインを、後ろ向きで泉へ投げ入れるのが有名な。あれ、コイン3枚で3つの願い事が叶うらしいのね。1枚は再びローマへ、2枚なら大切な人と永遠に一緒にいられるっていう言い伝え。真偽やご利益は兎も角、一年間に貯まるコイン、2億円にもなるんだって。かなり凄い賽銭箱でしょう？——えッ？ 3枚だと……何だったかな？ 忘れちゃった——ごめんなさいね。時間を作れなくて。あまり会えなくて。これでもさ、スケジュールを調整したり、アナタの都合に合わせて日時や場所を工夫したりして、上手く遣り繰りしているつもりなの——」

木々の間を縫って散歩する。

背伸びをしたり、深呼吸をしたり——
ヒグラシの鳴き声が聞こえる。

ルイ「——涼しくて気持ちいい。一緒に何度目の夏だろうね。フフフ、ねえ、覚えている？ あの夏の日のこと。真夏のあの一日。ああ、あれは考え物だと思ふよ。普通の女性なら、間違いなく、ヒク。リサーチや研究を兼ねてっていうのは分かるけど。初デートの最初に、モーニングセットの喫茶店を2軒ハシゴって。しかも、あッ、チョッと待って——夕食も店をハシゴしました。3軒も。黙っていて——フフフ、でも、遊園地は楽しかったなあ。お化け屋敷で、手を力一杯握られて痛かったけどね、フフフ。私、初めだったの。20歳過ぎで遊園地デビュー。子供の頃は、行く機会がなかったから。帰り道で、花火大会をやっていたでしょう。川辺の土手から見た打ち上げ花火は、大きくて綺麗だったね。ああいう

のも初めてで——ン？ えッ？ 何て？」

恋人の声「俺、結婚した。2カ月前」

ルイ「……何、言っているの？ 悪い冗談。笑えない……笑えない！」

BGM♪「四季」♪〈夏〉の第3楽章。

(恋人を追って詰め寄るように) 歩き回る。

ルイ「何ッ!? どういうこと!? そんな話、初めて聞く! いやいや、待って待って待って。結婚どころか、そういう女がいたことも知らない。他に女って、二股だよ!? 何処の誰? 店の子? 客? 取り引き先の女? いや、そんなことでもいい! いつから? 2カ月前って——ああ、そう。ジューンブライドね。何、その女のご希望? いやいや、そんなことでもいいの! ね、約束していたよね? いつって決めてはいなかったけど、そのうち、良いタイミングで、私とって!——えッ!? チョッ、チョッと待って! 子供って、何ッ!? その女が妊娠して——前の奥さん? 知らない。知っている! バツイチは知っていたけど、子供がいるなんて——幼稚園の年長さん?——何だったの? あの約束そりゃ、いつも近くに居るわけじゃなかったし、いつでも会えるような感じでもなかったから、私も悪かったかもしれないけど、約束して——そう、口約束! そうそう、そうですッ! でもね、だけどね、いつかはって言ってくれたから、私はアナタのその言葉を、アナタとの約束を信じて——」

(恋人が止まったため) 立ち止まる。

恋人の声「無理だよ。君が、想い続け、恋しているのは、踊りだけだ。ルイにとって、踊り以外のすべては、その他。もう、俺は無理だよ」

(恋人に) ゆっくりと背を向ける。

ルイ「……何を……住む世界が違うって?……そんなの、最初から!……嘘、嘘吐き!!」

怒りと切なさ地震え、自身の体を抱き締め、悔し涙を流す——

BGM♪「四季」♪〈秋〉の第1〜第2楽章(約8分20秒)。

27〜37歳の頃にあるであろう熱意や成熟などをダンスによって表現し、その最中、衣装替えやメイクの修正も行う。

明転(帯状ゴムの設置を変更)。

鈴虫の鳴き声が聞こえる。

パーティー会場——带状ゴムの最下部が上手(または下手)の一カ所に集結し、インテリアのデザインの様にも見える。

群衆の雑音が聞こえて来る。

ドレス姿のルイ(37)が中央へ歩み、大袈裟な仕草で会釈する。

ルイ「——ハハハ。ハイハイハイ、分かっているわよ。私より目立っていた、あのプレゼンテーターの真似をただけ。ねえ、ジーン！ 笑い過ぎ。ジェニファーもよ。ハハハ、でも、有難いわね。あんな風に盛り上げて下さったんだもの」

(参加者達に)次々と軽く挨拶をしながら歩き回る。

ルイ「以前、アフリカの授賞式では、プレゼンテーターがラクダに乗って登場したわよ。私は、客席にいたんだけど、驚いちゃって。その後、閉会のパーティーも参加したのね。そうしたら、飲食のテーブルに、ラクダの肉料理とミルクが並んでいたわ。ハハハ、嘘じゃない、本当。私、嘘は吐かない——ねえ、あの洒落たデザインの虫カゴの中、鈴虫でしょう？ 折角、誰かが気を遣って用意してくれたんだらうけどね、日本人以外の殆どは、虫の音色を雑音としか思えないらしいの。ごめんなさい——」

歩みを進めて立ち止まり、軽く会釈をして椅子に腰掛ける。

ルイ「申し訳ございません、ご無沙汰致しております。お変わりはないですか？——いいえ、今回のこれは、言わば功労賞みたいなものなんですって。私、まだ20年程しか踊っていないのに、引退勧告のようでしょう？ ハハハ。まあ、日本でもそうですけど、才能のある若い舞踏家やダンサーが次々と出て来て、注目もされて。いい刺激に——負けん気に火が点きますの。ハハハ、そのうち、潰してやりますわ。ハハハ——」

一礼して立ち上がり、(紳士と)歩く。

BGM♪「四季」♪〈秋〉の第3楽章。

ルイ「——ええ。南米とはご縁がありません。そういうお誘いでしたら、是非——ああ、あそこに。詳細やスケジュールを、ご相談下さい——えッ？——いいえ、それは——在り来り。いけませんわね、面白くない——いいえ、理想や主義なんて。アナタはいかが？ 理想や主義をお持ちで、私に？ 仕事の話の後では、無粋でしょう？ 艶がありません。無風、

微風も吹きませんもの——それこそ相性なのでしょう。可能性？ あるような。危険性もありますよ——恋、したいですわね。想い想われて。フフフ——あッ、ハイ！（手を挙げて）ここです——本日はお越し頂きまして、誠にありがとうございます！」

深々と一礼する。

音楽や効果音が一斉に消える。

明かりが弱くなる。

間。

ゆつくりと頭を上げ、見渡す。

ルイ「……ねえ……ねえ……何処……誰か…… 静か。あの賑わいが嘘みたい。大勢の方が駆け付けて下さって。舞踏家として、私も、まだ期待されているのかしらね。新しい仕事のオフアームも——フフフ、そうそう、違うお誘いも頂いたのよ。私、疾うに30を超えて、40にも手が届くのに——いいえ、勿論ね、恋愛はしたいわ。結婚もしたいわよ。子供だって……無理かしら……ねえ、何処、誰か、いる？…… 私、いる？」

手で自身の体を叩く（またはつねる）。

ゆつくりと彷徨う。

ルイ「——痛い——生きているのね——殆どすべて、仮初めの夢物語の連続、仮初めの関係ばかり——さめたら、怖い。さめたら、一人ぼっち——嘘や偽り、夢や幻、泡沫ね——渴いてしまえそう……ヤダ……」

明かりが一灯のみになる。

踊りの手振りをする。

ルイ「踊りは、裏切らない。嘘を吐かない。私を一人にはしない。だけど……冷たい風が、吹く。心に穴を開け、切り裂き、擦り抜けて。凍える風は吹く……ねえ……ねえ……誰か、いないのね。私も……じきに、踊りに囲まれ、真ん中、人知れず倒れ、ひっそり、朽ち果て……かしら……」

哀しみに暮れ、悲しい涙を流す——

BGM♪「四季」♪（冬）の第1〜第2楽章（約6分30秒）。

37〜47歳の頃にあるであろう熟練や劣化などをダンスによって表現し、その最中、衣装替えやメイクの修正も行う。

明転（帯状ゴムの設置を変更）。

冬服のルイ(47)が椅子に腰掛ける。

地明かりに戻る。

ヒヨドリのおさえずりと暖炉の音が微かに聞こえる。

山荘の居間——带状ゴムが上手と下手の両サイドに分けられて集結し、開けたカーテンの様にも見える。

ルイ「——(鼻歌があつて) ううん、確かに。右へターンした方がスムーズに行くのか。うん、うん——フフフ。ううん、そうね。いろんな国のいろんな場所で踊った。世界の六大陸すべて。あ、南極以外ね。劇場や野外ステージ、人のいない自然の中。水がナイアガラの滝の様に後ろで流れ落ちていたり、大小沢山の風船やボールがステージ上を跳ねていたり、白銀の世界やヒマワリ畑の中でも踊ったりしたわ——まあ、そうだったことも。舞踏、ダンスの歴史や伝統がある国では、観方や評価の厳しい面があるし、その逆に興味や好奇心を持って面白がる方々もいるし——負けないわ。神様がくれた天職だもの——」

立ち上がり、ゆっくりと歩き回る。

ルイ「——一番思い出に残っている公演は、日本なのよ。それは、大きくない公民館で、数人、何組かが、順番に出演したんだけどね。私、一つだけリクエストしたの。幅のない、豊一豊程の大きな水槽を用意して、その中に、金魚を一匹泳がせてほしいって。赤と白のヒレが、ドレスの裾の様にヒラヒラ揺れて綺麗だね。まるでチュチュを着て宙を舞う、小さな踊り子。えッ、私？ そう。フフフ、良かった。何年か振りの日本公演だったわ。故郷で——母さんが観に来たの。父さんと一緒に——あれが、最初で最後。一度切りだった——聞いている？ 聞こえている？ (立ち止まり、奥へ振り向いて) ねえ、母さん——写真の母は、微笑んで——珍しく微笑んで——珍しい一枚——」

带状ゴムをカーテンに見立て、窓から外を眺める。

ルイ「もつと器用に、もつと要領良く過ごせていたら、少しは、楽しく生きられたのに。何事に対しても正直で、一途過ぎたのよ、母さんは。多分、父さんもね……人生を、踊れなかったの——フフフ、躍ることしか出来ない私も、不器用か。これって家系？ 血の繋がり、絆、かしら？——今更ね。この歳になって、ようやく今頃……幸せよ、私、今……」

再びゆっくりと歩き回る。

ルイ「——違うわよ。器用でしよう、アナタは。仕事も家事も、何でも上手に出来ちゃう。完璧よ。不器用なのは——嘘を吐くこと。アナタの嘘は、すぐに見破れるわ。本当か嘘か、疑う間もいらぬ——それはダメよ。秘密にしておかなかつちや。フッフ——他は、寝起きが悪かったり、食べ物好き嫌いが多かつたり、洋服のセンスがなかつたり。あれ？ 完璧じゃない。ううん——（独り言で）アナタ、思い遣りが過ぎるの。私は未だに慣れなくて、怖い——ン？ 何でもない。内緒の独り言——」

再び椅子に腰掛ける。

ルイ「——幕は下りない、素敵な夢の途中よ。躍ることで自分の世界観を表現して、観る人がそれを感じてくれて、その反応の空気が私を満たしてくれて。30年間、いろいろと犠牲にしまつたけど、私、それなりに、今の自分が好きだわ。フッフ、バカね」

明かりが一斉に消える。

BGM♪バースデーソング♪（オルゴール）。
明かりが一灯のみ灯る。

マイの声「お誕生日、おめでとう！ ママ」

（娘のマイ（8）と同じ目線に）睨き、明かりを両手で搦うように——

ルイ「——ありがとう。手作りなの？ そう——勿論、海外公演の時も連れて行くわ。マイだと思って、いろんな景色を沢山見せてあげる——えッ？ 大きくなつたら？——好きになさい。マイの人生だもの。したいように、思うように。自分で幸せをね……（微笑んで）楽しみも貰つちやつた。これからの、未来——」

（マイを）抱き、嬉し涙を流す——

BGM♪「四季」♪（冬）の第3楽章（春）の第1楽章（約7分）。
地明かりに戻る。

ゆつくりと立ち上がり、（マイと一緒に）ダンスをする。
楽しそうに笑い、戯れ、愛おしく——

（夫は、部屋の片隅で二人を見守っているであろう。）
ここにあるのは、無数の涙の結晶である幸せ——
明かりが徐々に落ちて行く——